

● 東 北

正 木 裕 美

引き続きコロナ禍にあった2021年、折しも東日本大震災からちょうど10年の節目を迎えた。復興に係る企画も少なからず影響を受けたが、関係者の想いと努力で形を変えて実現するケースも目を引いた。ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団とサントリー芸術財団による被災地支援もそのひとつ。両者は2億円の音楽復興基金をもとにコンサートや音楽指導を被災各地で行い、2012年から19年まで同フィル楽団員をのべ91名派遣してきた。20年来日時はコロナ禍のため訪問は叶わなかったものの、サントリーホールにおける青少年プログラムを収録し、21年に被災地の学校関係者ほかへ限定公開している。1月9日には16年にサントリーホールで共演歴のある仙台ジュニアオーケストラが上映会を行い、OBを含め20数名が集った。「交流を機に大学でドイツ語を選択しました。グローバル化が進む中、この経験役を立役たい」との参加者の言葉に、支援の実りを実感できる。

地域の復興に寄り添う「音楽の力による復興センター・東北」は、3月29-31日に「復興コンサート10年のあゆみ」を予定していた（せんだいメディアテーク）。折悪しく緊急事態宣言により中止となるが、別途収録を行い、多くの人の目に留まるオンラインでの公開へ舵を切った意義は大きい。杜の弦楽四重奏団や後藤優子(MS)&田村聡子(p)、そして仙台フィルのメンバーほか、復興支援に携わった音楽家らが音楽でその歩みを伝えた。

小山実稚恵が東日本大震災を機に立ち上げた親子向けイベント「こどもの夢ひろば「ボレロ」～つながる・集まる・羽ばたく～」は11月27-28日、日立システムズホール仙台で行われた。コロナ禍の影響で2年ぶりの現地開催となり、ワークショップには「防災」や「健康」など時事のテーマも盛り込まれた。メインの「ボレロ」公演にはオーケストラや合唱への「予想を超える数の参加希望があった」（関係者）そうで、コロナ禍で様々な交流が断たれる中、待望の開催となった。

オーケストラ界限に目を向けよう。1月以降の主催公演の中止は山形交響楽団は0件、また仙台フィルハーモニー管弦楽団は1件。依頼公演やスクールコンサートの中止も鑑みればまだまだコロナ禍の影響も少なくないが、同時に共生も進んでいる。

仙台フィルが12月25日、「第九」を2年ぶりに解禁したことも大きい。感染対策のため合唱をステージ前方へ移した異例の配置は（客席前方5列は使用中止）、同時に作曲家在世の慣習を意識した取り組みでもある。また山響との合同公演（11月27日・石巻 マルホンまきあーとテラス）ではマスネの組曲「アルザスの風景」に語り（林家たい平氏）を付けたオリジナル構成で臨んだ。仙台フィルの制作担当者による石巻とアルザスを結ぶ物語には、「離れていてもきっと会える」という想いが込められている。前年に4か月間活動を休止した反面、本年はこうしたメッセージ性が目立った。更に遡って1月から3月の定期演奏会では武満徹没後25年特集を組み、「系図-若い人たちのための音楽詩」などを熱演。語り地元の若手、高平響さんを起用し、わたし、をとりまく世界をリアルに描いている。またNHK音楽祭仙台公演での高関健（レジデント・コンダクター）、藤田真央(p)との密度の濃いアンサンブルも記憶に新しい。来期は常任

指揮者を退任する飯守泰次郎、高関、角田銅亮による3者体制の集大成を迎える仙台フィル。その取り組みに注目したい。

前年に他に先駆けたオンライン配信で注目を集めた山響は、阪哲朗の常任指揮者就任から2年を経て勢いに拍車がかかる。ピットに入った東京二期会山形公演、モーツァルトの「魔笛」（10月9日・やまぎん県民ホール）では欧州でオペラの実績を積んだ阪のニュアンス豊かな指揮が際立った。また第297回定期（11月20、21日）では芥川也寸志「トリプティーク」やシベリウスのヴァイオリン協奏曲（vn：辻彩奈）を造形美豊かに描き、辻の艶やかで堅固なソロと共に大きな話題を呼んだ。辻はベーター・ヤブロンスキーの代役だったが、コロナ禍で代替公演が期待と予想を上回るケースも少なくない。第295回定期（9月25、26日）もまた然り、予定していたオッコ・カムの北欧プログラムそのままに、3年7か月振りの広上淳一の指揮でサリネンのクラリネット、ヴィオラと室内オーケストラのための協奏曲の日本初演を果たした。広上の手腕はもちろんのこと、ソリストを務めた楽員、川上一道（cl）、山中保人(va)の貢献度も大きい。「高い芸術性を以てこそ山形の魅力のひとつとなり得る」という信条そのままに、高水準の演奏が耳目を集めている。

音楽祭は前述の「魔笛」が上演された「やまがた芸術の森音楽祭」ほか、「仙台クラシック・フェスティバル（せんくら）」や「八戸イカール国際音楽祭」などが行われた。せんくらは10月1日より3日間、2年ぶりに本来の「せんくら」として開催。有料公演は昨年比で2日間15公演→83公演、1施設3会場→4施設10会場、延べ来場者数約3,190名→20,800名と大きく規模を上げ、郷古廉（vn）や長尾春花（vn）、カルテット・アマビレ、鈴木優人率いるバッハ・コレギウムジャパンなど225名のアーティストが参集した。ちょうど宮城県では緊急事態宣言が解かれ、来場者からは「コロナ禍以降初めて演奏会へ訪れた」との声も聞こえたが、一方で主催者は公演差替え、会場内の感染対策などへの苦慮や配慮を渗ませた。例えば長尾の公演はシャノン・リーの来日中止により急遽新設されたもの。ハンガリー国立歌劇場管弦楽団のコンマスらしく切れ味の良い濃密な演奏を聴かせたが、やや空席が目立った。聞けば先の宣言中、プロモーションも自粛せざるを得なかったことが影響しているという。大ホール公演も例年より空席が見られるなど、やはりコロナ禍の影響は避けられなかったようだ。またイカール音楽祭は8月13日から6日間、コンサートや受講生を集めたミュージックキャンプを予定していたが、2日目に感染者が判明。そのため講習を中止し、残りのコンサートはオンライン開催に切り替えライブ配信を行っている。

室内楽やソロの公演は、一部で延期や客席数制限などの対応を取りつつも、シリーズものが好調。アルト歌手高山圭子を中心に展開する「Schubertiade in Sendai」は、仙台市太白区の楽楽ホールを会場にシリーズ4回を数えた。また仙台銀行ホールイズミティ21における「イズミノオト」は主宰する吉岡知広（仙台フィル首席チェロ奏者）が青木尚佳（vn）、会田莉凡（vn）、安達真理（va）ら国内外在住の旬の奏者を集めている。これまで仙台フィル奏者同士の室内楽が盛んだった風土に新たな風を吹き込み、知的で質の高いアンサンブルを展開している。また小山実稚恵の2年にわたるシリーズ「ベートーヴェン、そして…」は11月3日、日立システムズホール仙台で5回のリサイタルを完遂。感染対策のために客席を半数に制限した空間で、ベートーヴェンやシューベルトの深淵な世界を紡いだ。小山ゆかりの地、仙台で残すは延期になった仙台フィルとの協奏曲のみ。2023年2月の公演をもって、シリーズは幕を閉じる。